Shining ほいく

第３９号　　令和４年３月１日
編集・発行　保育サービス課研修担当

『Shining　ほいく』は研修の振り返りと実践への活用を目指し発行する機関誌です。
受講での学びをどう実践に活かし保育の向上に繋げていくか、そして他園ではどのように研修内容を活用しているか等、職場の仲間たちと一緒に読んでいただき、専門性構築に『Shining　ほいく』を活用していただきたいと思います。

～活用法～

① 「この間の研修どんな研修だった？」と話すときに参考になる
② 他園で研修をどのように活用しているか知りたい時にためになる
③ 保育を見直したい時になるほど！と気づきがある

＜今回掲載した研修＞
◇　キャリアアップ研修・・・乳児保育
◇　０歳児産明け園実務研修

◇　キャリアアップ研修『乳児保育』　9月～10月(計5回)

皆さんの研修記録より　～感じた事・学んだ事～

【第１回】　９月２日　『乳児保育の意義』

東京大学大学院教授　遠藤　利彦先生

☆心と体の健康、幸せの形成に「アタッチメント」は重要な役割。
「アタッチメント」とは、子どもが怖くて不安な時、特定の信頼できる人にくっつき、安心感を得ること、浸ること。自己信頼（自分で愛してもらえる感覚）、他者信頼（人って信じていいという感覚）。
☆「アタッチメント」は心の土台形成に重要なものであり、これがあることで心が育ち、非認知能力や認知能力が高まり、人生を豊かにしていく。

- 乳児期の発達を支え促す保育では、質の高い養護が質の高い教育でもあるという話は、とてもわかりやすかった。
- 乳児保育の少人数グループ別保育により「アタッチメント」を大切に保育をすすめていきたい。
- ただ受け止めるだけではない、心の基地になり、自立するところまで支えるのがアタッチメントだと知る。

【第２回】　９月１３日　『乳児保育の環境』

東京家政大学　准教授　野口　隆子先生

☆子どもの周りにある環境を適切に整えていくことにより、試行錯誤や探求の質を上げることができ、心地よい環境設定に繋がる。
☆３つのＴ
Tune in（寄り添う）、Talk More（ぴったりくる言葉をたす）、TakeTurns（やりとりにいざなう）
☆過去の人生経験の中で形成したものの見方・感じ方・行為の仕方の習慣的な枠組みを固定化させるのではなく、変容させ続ける

- 保育士がリードしすぎずに、子どもの興味・関心を受け止め、子どもが主体となり進めていけるような保育を行っていきたい。
- 子どもの主体性や自発性を伸ばしていくためには、“ヒト・モノ・コト”といった環境を整えたり、時には大人が誘っていきながら関わることが大切だと学べたので、活かしていきたいと思う。
- 子どもがどうしたいのか理解できても先回りはせず、子ども自身が何かのアクションを起こしたところを見逃さずに受け止めていく

【第３回】１０月１日　『乳児への適切な関わりと配慮事項』

名古屋芸術大学　名誉教授　星　三和子先生

☆イタリア・ピストイア市の保育の実践
計画に添った保育ではなく、子どもの好奇心や興味を日々観察した上でどういうことを次に仕掛けていくかを考えていくという方法で進めている。週報というやり方も、保育士間での共有を週ごとに密に行うことができ、また、保護者にも知らせている。
☆日本と比べると、保育者一人に対しての子どもの人数は多いが、空間的、時間的にゆったりした環境で、子ども同士のいざこざも起こりにくい環境になっている

- 子どもは、大人が思っているよりずっと周りに働きかける力を持ち、日々の中で自分で成長発達していけるということを頭の片隅におきながら、「見守る保育」を意識していきたい。
- 子どもたち一人ひとりの姿をしっかり捉えながら、主体性を伸ばしていけるような保育を、担任間で共有しながら進めていきたい。
- 日々の保育の振り返りや共有を大切にしながら、子どもの意欲へつなげられたり、発見に応答し発展させられるように心がけて保育をしていきたい。

【第４回】１０月７日『乳児保育の指導計画・記録及び評価』

聖徳大学　専任講師　深津　さよこ先生

☆計画を立てるポイントは、子どもの未来を考えて計画する
☆指導計画の展開→計画に従うよりも子どもの姿に沿って変更していく。
☆記録や評価は PDCA を行いながら、自分だけでなく、クラス保育では職員の共通理解、話し合いをきちんとして、意見をすり合わせていく事が大切

- 赤ちゃんの声や、行動には意思や思いが込められているので、日々よく観察し、推測して、応えていくことで、生まれた時から子が持っている力を消さず、引き伸ばしていけるような保育をしていきたい。
- 子どもの現状をよく把握した上で「未来の子ども」を想像し、次につながる保育内容を「子ども主体」を意識し考えながら計画を作成していきたいと思う。
- 保育の質が向上されることで、一番の恩恵を受けるのは子どもたちであり、保育者が目指すところである“子どもの最善の利益”に繋がっていくのだと感じた。

【第５回】１０月８日　『乳児の発達に応じた保育内容』

十文字女子大学　教授　上垣内　伸子先生

☆子どもの世界を尊重した関わり方
子どもは生まれた時から能動的な存在であるため、保育者にはその世界を尊重していく役割がある。尊重していくためには感受性と応答性がとても重要である。
☆子どもの発達を長い目で見たり、多様性があったりすることに気づくといったゾーンで捉えることが大切である。また、子どもが何かできるようになったことより、その子の内面に何が生まれているのだろうかと考えていくことが大切である

- ひとりひとりの持っているリズムやテンポを感じとり、子どもからの発信への感受性と応答性を大切にしていきたい。
- 子どもの遊びや友だち関係等、つい介入してしまいがちの時もありましたが、子どもは有能であるという視点で、子どもの力を信じて見守っていき、適切な関り方を考えていきたいと思います。
- この数年で特に感じた当たり前が通用しなくなっている今、今後の未来を生きていく子どもたちに何を経験できれば良いかを考える必要がある。

研修内容の活用　～キャリアアップ研修(乳児保育)を受けて、各園の取り組みを紹介します！～

高島平けやき保育園：研修全体で学んだこと・職場での活用

キャリアアップ研修　『乳児保育』

全５回にわたり乳児保育の意義や発達に応じた保育内容、環境づくり、指導計画の立て方など、様々な視点から学びました。

「保育」＝“care”［養護］and “education”［教育］
質の高い養護が質の高い教育でもある

１月７日（金）０歳児クラス
うまれて初めての雪遊び

前日、東京にもめずらしく積もる雪が降り、園庭の隅に残る雪に触れて遊びました。触ると柔らかくて冷たい『雪』というものに、興味津々で触れる子、サクサクと踏みしめてみる子、それぞれが新たな体験に夢中でした。

生涯学習の鍵となるアタッチメント

人生の出発点の乳児期にどういう経験ができるかにより、その後の生涯発達や心と身体の健康や幸せの基準に関わっています。周りの大人が子どもにとって安心の基地・避難所として変わらずにあり続けることと、不安や恐れの感情から子どもが崩れた時に、安心感を与えて立て直してあげるアタッチメントを確実に安定して経験できるかが大切であると学びました。

アタッチメントとは、物理的に「くっついていること」そのものよりも「いざとなったらいつでもくっつける」という感覚の重要性であり、安心感を十分味わい、保護してもらえるという確かな見通しに支えられ、成長とともに自律性を獲得していくことであります。その安心の基地・避難所の役割の重要性に、身が引き締まる思いでした。

子ども達のための保育環境づくりについて学ぶ

保育園の環境(ヒト・モノ・コト)について、保育指針からの視点や実践例から学ぶことが出来ました。「子どもが環境と関わる力の発達段階を追いながら」の話は、実際の保育環境を思い浮かべながら、なるほどと思ったり、再構成のアイデアが浮かんだりと自分自身の保育の振り返りにもなりました。

「子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」という基本原則は、環境を整える上でしっかり心に留めておこうと思います。毎年同じ、ではなく「今」の子どもの姿に応えられるように、学び、感じ、努めていきたいです。

研修内容の活用としては、子どもの発達のプロセスによってチャレンジや探索活動の質が異なるという視点で環境の構成を考えていくことと、乳児期の保育で大切な応答性において、過剰な読み取りや先回りなどのないよう職員間で確認し、即実践することができました。

＝子どもの未来を見据えた保育とは何か＝

指導計画を立てるにあたっては、今の子どもの姿や少し先の姿の目標を考えていましたが、新たに「10 年後、20 年後に役立つ未来のための保育」と「最新の保育の知見」という視点を加える事で、さらに保育実践の計画として実りのあるものになると学びました。発達には連続性があり、子ども時代の発達が生涯に渡り繋がっている事を考えると、保育内容のあり方や子どもにどんな経験が必要なのか、より明確なイメージを持つことができました。

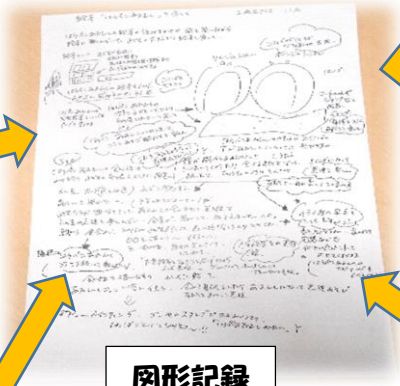
新河岸保育園
キャリアアップ研修『乳児保育』研修の活用

「乳児保育の環境」という講義のなかで『園の絵本と場を考える』というテーマにそった【図形記録の演習】を受け、受講中に子どもたちと絵本を中心にして最近どのような活動があったかを図形記録として作成しました。

2 歳児クラス【はらぺこあおむしごっこ】

ねらいは で囲む、保護者関連は★などマークを付けると整理しやすいと教わり、工夫しました。

はらぺこあおむしの帽子を一人ひとりのロッカーに置くと・・・なりきって遊び始めます



図形記録

『果物トンネル』&『手作り一本橋』子ども同士協力して運んで設定

子どもが絵の具で描いた『あおむしの食べ物』の掲示を食べたりしながら、友だちと一緒に楽しんでいます♪

保護者の「感想」や「家庭でのはらぺこあおむしのエピソード」を掲示して保護者や職員で楽しさを共有

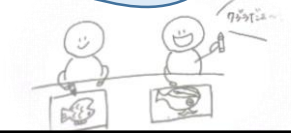
『はらぺこあおむし』に出てくる食べ物の絵を絵の具で色塗りした日のドキュメンテーション

講義の中で印象に残ったことば

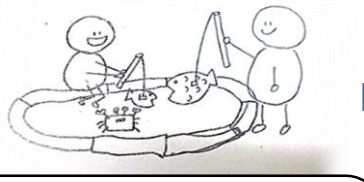
「子どもを良くみつめ寄り添う」「子どもが自発的・意欲的に興味を持った好きな遊びが実現できる環境を整えていくこと」「温かな保育士との適切な関わりが大切」

研修後も子どもの主体的な遊びにつながるよう環境構成を振り返り、保育を実践していきました。子どもの興味や発想を捉えて、保育士のスパイスを加えています。

魚釣りごっこ



好きな画用紙を選んで、魚を描きはじめる A。それを見て一緒にお絵かきを始める B



「魚釣りをしようか？」→「たくさん釣りたいな」「魚釣りには釣り竿がいるね！」→「海」をウエーブバランスや一本橋で、保育士や友だちと協力して作って、魚釣りごっこへ！

そのうち、「A お魚になる！」と、手足を動かして魚になりきって海の中へ…。保育士が A を抱っこして「釣れた～！」大喜びの A。他児も真似っこして魚になりきって楽しみました。

子どもの環境構成について

『子どもが保育園に心地よく「居ること」ができるよう環境を整えていく』

『子どもをよく観察して、好奇心、興味を捉え応答的に関わっていく』

『子ども同士での発展や自発的に成長する力を穏やかに支えていく』

など、研修で学んだことを保育の中で心がけています。

子どもの主体的な遊びにつながり、友だちと楽しさを共有しながら遊びが発展しています。

◇　0歳児保育の実践・実務研修

皆さんの研修記録より　～産明け保育の実習を通しての学びや気づき～

環境について

- 子どもの発達に合わせた環境作り
- 安全面と保育士の動線を考慮した環境や玩具の置き場所の工夫
- サークルを使って産明け児も安全に遊べるコーナーを作る
- 産明け児のベッドの高さ、使用マットの配慮
- 保育室入り口で手洗いができる
- おむつ交換場所を明るい雰囲気にしている
- ホワイトボードを活用した情報共有

保育について

- 産明け児の１対１のゆったりとした関わり
- 特定の大人との信頼関係の構築で安心して過ごせる
- 園児一覧表、細部に至る職員間の情報共有
- 良好な職員関係の構築
- 玩具や使用物品の消毒の徹底。子どもが口にしたものは、すぐに片付ける。
- １歳になるまで、当番、土曜日は別保育
- 保護者が分かり易いように掲示の工夫
- 災害時には、各家庭の抱っこひもを使用させてもらう

食事について

- １対１の食事介助。基本は担当保育士。他の子の保育は、食事介助中は担当にこだわらず、月齢や発達に合わせてグループ保育を行っている。
- 食事介助は１対２。子どもを待たせず、出来立ての温かいものを提供。子ども同士で食べている相手を見ることが刺激になる。
- 発達に応じて離乳食を進めていくときに保育士、栄養士、調理と共通認識できる様に形態一覧表作成
- 決まった食材で手つまみを用意するのではなく、子どもがつかんだものを尊重する。食べにくい食材を選んだ場合、後付けとろみをかけて誤嚥を防止する
- 入園面接時に看護師が独自に作成した食事に関するアンケートを実施することで、月齢のみではなく、個人に合った離乳食を提供する
- ５～６か月頃食の個人票対応を知ることができた。産明け園でなくても離乳食の開始が遅くなっている子に生かせる
- ７～８か月頃食児のフォーディングスプーンの使用

～看護業務の実習を通しての学びや気づき～

産明け（０歳児）保育での役割について

- 月齢差に応じた対応が求められ、健康・発達面や授乳・離乳の援助分野での関わりが多い
- ホワイトボードに子どもの睡眠・食事や健康面などを記入することで情報共有し、その日の保育に活かす
- 離乳食の進め方（保護者との確認や調理員・担任との協力など）を工夫し行っている
- 食事介助は保育士が主だが、子どもの状況を把握するためにも食事の介助は不可欠
- 食事の介助や睡眠などは担任と協力して行い、子どもたちが安心・安全に過ごせるようにすることも大切
- 災害時の対応（産明け児の移送やミルク等の準備）

保育園看護師の役割や仕事について

- 看護師の役割（園全体と０歳児保育）を明確にとらえ、保育士との連携を図る
- 医療的視点から園児をケア、サポートする
- 保健管理業務の手引きを活用しながらも工夫して業務することも大切
- 看護師の業務について職員に説明してその内容を理解してもらい協力を得る
- ０歳児クラスの担任という位置づけではないが、食事・睡眠の時間や子どもの成長発達の把握に関わる
- 環境整備が事故防止につながる
- 事故防止、ヒヤリハットに関する関わり
- アレルギー除去食の対応は、栄養士や担任と連携して実施している
- 園児や保護者への保健に関する発信を行っていく
- 巡回を行い、園児の健康観察を行っている

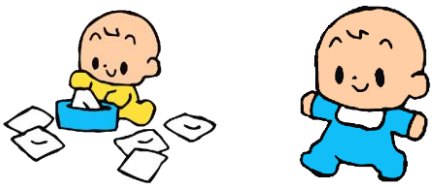
０歳児産明け園実務研修を受けて　～さかうえ保育園～

☆保育について☆

- 特定の大人との関わりの中で、子どもとの信頼関係を形成し、安心して過ごせることが大切である。
- 産明け乳児の特徴や発達を理解する。一人ひとりの発達をしっかりつかみ、成長への仲立ちをする。
- 子どもの心地よい環境を作るために保育者同士の連携を図っていくことが重要となる。
- 保育園で過ごす時間だけではなく、家庭と密に連絡を取りながら、24 時間を見通した上での一人ひとりのリズムに合わせた保育を大切にしている。→ホワイトボードに記入し、情報共有を行っていた。
- 離乳食においては、保育士、栄養士、調理、看護師と共通認識できる様に形態一覧表を作成している。ミルクの量や提供時間は月齢ではなく個人に合わせる。

☆環境について☆

- 初めて保育園に子どもを預ける方も多いため、安心してもらえるよう温かみのある雰囲気を大切にしている。
- 安全面と保育士の動線を考慮した環境設定。（サークルを使用し、産明け児も安全に遊べるコーナーを作る等）
- ０歳児は特に発達が著しい時期であるため、毎月子どもの様子を細やかに見ながら環境設定を考えていく必要がある。
- 成長や発達に合わせた遊びや玩具を取り入れていく。そして、子どもの表情や動作の反応を確認しながら、物の配置を変えるなどの工夫をしていた。
- 玩具や使用物品の消毒を徹底する。消毒が難しい玩具は使用を避ける。



今回の実務研修を通して、産明け保育は一人ひとりの発達を踏まえて、特定の大人との関わりの中で安心して過ごせることが大切であると学んだ。

また、保育の室内環境整備はとても大切であると再確認した。研修後に自園の室内環境を確認すると、玩具が多く置かれていたため、安全・衛生面にも配慮した上で整理をした。今後も定期的に子どもに合わせた環境作り、援助を看護師の役割から考え実践していきたい。

年度末のお忙しい中、各園のご協力、ありがとうございました！　Shining ほいく担当係より